

ベトナムの初等日本語教育における ポートフォリオ活用の試み

— 試行段階から普及段階への移行期にかかる課題解決に向けて —

武田素子・ゴー ティ キェウ ガー・五十嵐裕佳

1. はじめに

ベトナムでは、2008年に国家政策として「2008-2020年期国家教育システムにおける外国語教育・学習プロジェクト」(以下、国家外国語プロジェクト)が立ち上げられ、小学3年生から高校3年生(12年生^①)までの10年間の外国語教育強化の方向性が示された。そして、このプロジェクトのもと、2016年9月^②より小学3年生からの第一外国語としての日本語教育が試行段階として開始された。その後、3年間の試行段階を経て、2019年8月にベトナムの教育訓練省によって2019年9月より普及段階へ移行することが承認された(国際交流基金 2020)。本稿では、ベトナムにおける初等日本語教育の試行段階から普及段階への移行の経緯、及び課題を概観したうえで、その課題の一部を解決するために行ったポートフォリオの活用の試みについて報告する。

2. ベトナムの外国語教育政策と初等日本語教育

2.1 ベトナムの外国語教育政策

ベトナムの教育訓練省は2008年に国家外国語プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトの目標は「ベトナム人若年層に外国語による意思疎通に自信をもたせ、多言語、多文化的環境で勉学、就業できる機会の可能性を広げ、さらにベトナム人民に外国語における優位性をもたせることで、国家の工業化、近代化への貢献を図ること」である(栗原他 2018:97)^③。このプロジェクトの目標を達成するため、国家教育制度下の外国語教育・学習の課題を全面的に刷新する目的で、全ての教育段階・学習レベルで外国語教育・学習に関する「普通教育カリキュラム」を作成、導入することとし、小学3年生からの10年間の外国語教育が決定された。そして、このプロジェクトに基づき、ベトナムの教育訓練省と在ベトナム日本国大使館は2016年に小学3年生から第一外国語として日本語教育の導入を目指すことで一致し(在ベトナム日本国大使館 2016)、国際交流基金ベトナム日本文化交流センター(以下、JFVN)はプロジェクトの立ち上げ時より、ベトナム側のカリキュラムや教科書開発への協力^④、教師研修や巡回指導など初等への日本語科目の導入に向けた支援を行っている。

2.2 ベトナムにおける初等日本語教育

2.2.1 試行段階から普及段階への経緯

国家外国語プロジェクトにおいて、第一外国語としてどの外国語を導入するのかについて英語以外は決められていなかったため、日本語を導入するためには試行を行い、教育訓練省による承認を得る必要があった⁵⁾。そのため、2016年9月にハノイとホーチミンのモデル校5校で小学3年生を対象に初等日本語教育の試行が開始された。その後、2019年5月にモデル校5校において当該生徒たちが小学校を卒業し、3年間の試行が終了した。そして、2019年7月に3年間の試行を評価するための「初等日本語教育試行導入評価セミナー」(以下、評価セミナー)がベトナムの教育訓練省によって開催された。評価セミナーにはハノイとホーチミンの教育訓練局、モデル校、教科書作成チーム、試行版の教科書の出版社、在ベトナム日本国大使館、及びJFVNの代表者が参加者として集められ、各機関の代表者がそれぞれの立場から報告を行った。その報告をもとに、教育訓練省によって課題はあるものの試行は成功したとの見解が示され、2019年9月から始まる新学年度より普及段階に移行することが承認された。

その一方で、小学3年生からの第一外国語の学習を必須とする内容を含む初中等教育全体を扱った「普通教育カリキュラム」は2018年に発表され、2020年9月から適用されることとなっていた⁶⁾。そのため、普及段階への移行が承認されたもののこのカリキュラムに基づき小学3年生から第一外国語として日本語教育が実施されることになるのは、カリキュラムが適用される2020年9月に入学する小学1年生が3年生に進級する2022年9月からとなる。そこで、移行期間となる2019年9月から2022年8月までは試行を実施したモデル校のうち、実施を希望した2校において日本語教育が開始されることとなった(表1)。

表1 試行段階から普及段階への経緯

試行段階	2016年9月～ 2019年8月(3年間)	ハノイとホーチミンのモデル校5校で、1学年のみを対象として3年間の試行を実施。
普及段階 (移行期間)	2019年9月～ 2022年8月(3年間)	試行を実施したモデル校のうちハノイの2校で、2019年9月からは3年生、2020年9月からは3・4年生に対して実施。
普及段階	2022年9月以降	実施を希望する学校において、2022年9月に小学3年生となる生徒を対象に実施予定。

つまり、小学3年生からの日本語教育が普及段階に入り、希望する地域や学校で実施が可能となったという事実とその基盤となる「普通教育カリキュラム」が適用される時期が一致しないという事態が現出している。そのことの持つ問題、是非は別にして、JFVNとしては初等・中等の日本語教育の将来に向けた円滑な発展を支援するために、2019年9月から2022年8月までの3年間の試行段階から普及段階への移行期間として捉え、評価セミナーで挙げられた課題を解決しながらより円滑に日本語教育が実施できる環境をベトナム側と協力して構築していく

こととなった。課題については次節で説明する。

こうした状況において、実際には、普及段階移行後1年目となる2019年9月からは先述のモデル校5校のうちハノイの2校の小学校において3年生1クラスずつ、合計約120名の生徒に対して日本語教育が開始された。また、普及段階2年目となる2020年9月からは先述の2校において進級した4年生への日本語教育が継続され、新3年生への日本語教育も開始された。

2.2.2 試行段階における課題

2.2.1で触れた試行段階を評価する評価セミナーにおいて第一外国語として日本語教育を円滑に実施、また展開していくうえで課題として挙げられたのは、主に以下の4点であった。

ア. 生徒に関する事項

生徒が目標を持って勉強に取り組めるよう動機づけを高め、小学校で日本語を学習した生徒が継続して勉強できる環境の構築が必要。また、モデル校の担当教師から日本語学習が難しすぎるとの声があり、生徒が日本語の運用力を身に付けられるようクラス人数などの学習環境の改善が必要。

イ. 保護者に関する事項

生徒の学習の成果を可視化することでの日本語教育に対する理解の促進、及び日本語学習が将来どう役立つのか学習の目的の明確化が必要。

ウ. 教師に関する事項

教師の確保、及び初等教師が育成されるよう研修の実施が必要。

エ. カリキュラム・教科書に関する事項

試行段階の学習内容が小学生にとって難しいという声をふまえ、カリキュラムや教科書の内容の見直しが必要。

本稿ではこれらの課題のうち、主にアとイの解決のために行った取り組みについて報告する。

3. 課題解決に向けて～ポートフォリオの導入～

3.1 導入の目的とポートフォリオの構成

JFVNは2.2.2で触れた初等日本語教育に関する課題のうち、生徒の日本語学習に対する動機づけの向上と保護者の日本語教育に対する理解促進のため、普及段階（移行期間）に日本語教育を行う小学校にポートフォリオを導入してはどうかと考えた。そこで、JFVNで作成したポートフォリオのひな形をもとに学校側に提案をし、導入に至った。また、導入に際しては、新学年度開始前に初等教師に対してポートフォリオ導入の目的や授業での扱い方等についてブリーフィングも行った。今回の小学校におけるポートフォリオの導入は、ポートフォリオの効果⁷⁾のうち、特に「学校関係者・保護者・教師と生徒が学習目標と過程と成果を共有できる点」、

そして「生徒が自分の日本語の熟達度を評価したり、体験を記録することで学習に対する動機づけを高めることができるという点」を期待したものである⁶⁾。そして、ポートフォリオはJF日本語教育スタンダード(国際交流基金 2017)で提案されている構成を参考にして、①説明、②評価表、③言語的・文化的体験の記録、④学習の成果で構成した。以下、順にポートフォリオの各要素について見ていく。

3.2 ポートフォリオの各要素

3.2.1 説明

ポートフォリオという用語がベトナムの小学生にとってはあまり馴染みのないことばであることを考慮し、ポートフォリオをあえて「Hòm Châu Báu (たからばこ)」と名付けて導入することとした。そして、ポートフォリオの説明として、「たからばこは、大切なものを入れる箱です。あなたの日本語学習の記録は大切なものです。この箱に入れて、いつでもふりかえることができるようにしましょう。」という内容を記した紙を作成し、初回の授業で担当教師から生徒に説明を行った(図1)。また、試行段階では配付資料だけでなく、教科書やワークブックであっても学期の途中になくしてしまう生徒も見受けられたため、ポートフォリオに愛着をもってもらうことを目的として、説明の表面(図2)には、自分の顔と名前を書く欄を設けた。そして、初回の授業で記入した後、ポートフォリオのファイルに収納するよう伝えた。



図1 ポートフォリオの説明(裏面)

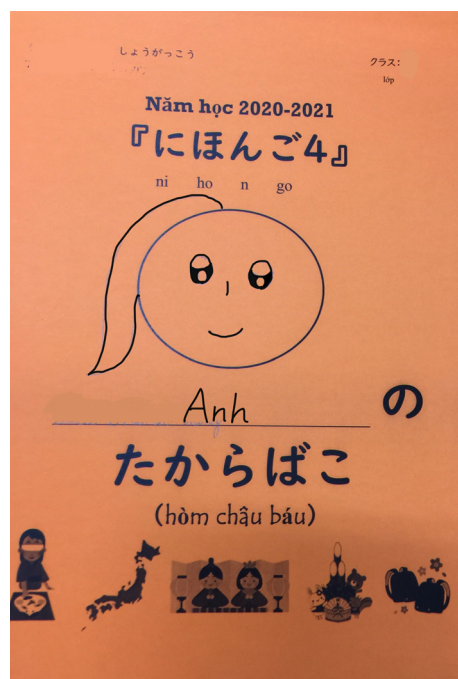


図2 ポートフォリオの説明(表面)

3.2.2 評価表

評価表は「Can-do チェックシート」と「学習評価シート」で構成した。

「Can-do チェックシート」(図3)は、該当学年で学習する各課の学習目標、自己評価欄、コメント欄を設けたもので、授業内に時間を作って、各課の学習が終わるタイミングでふりかえりを行い、各自「Can-do チェックシート」に記入するようにした。初等の教科書は、課ごとに課の最初には「学習目標」、課の最後には「ふりかえりましょう」という項目がある(栗原他 2018)。つまり、その課の最初に確認した目標が達成できたかどうかを課の最後にふりかえる流れで授業が構成されているが、教科書の各課には生徒が自己評価を記入する欄がなかった。そのため、学年全体を通して何を学び、何ができるようになったのか一覧できる表の形式にして「Can-do チェックシート」を作成した。また、「Can-do チェックシート」には、4課に1回担当教師と保護者の確認欄も設け、生徒が何を学び、何ができるようになっているのかを、定期的に担当教師と保護者が確認する流れとなるようにした。

そして、学習の成果が分かるものとして、学期末には「学習評価シート」(図4)を担当教師が作成し、生徒一人ずつに配付するようにした。「学習評価シート」は、各学期での学習内容とその成果が把握できるようにしたもので、授業で扱った課の学習内容(学習目標、場面を表すイラスト、文化で扱ったテーマ)と試験の結果、授業の様子を撮影した写真、担当教師からのコメントを記入した。評価シートの作成は担当教師が行ったが、各教師がシートを作成しやすいよう「学習評価シート」のフォーマットとコメント例はJFVNが作成し、担当教師に提供した。

図3 「Can-do チェックシート」

図4 「学習評価シート」

3.2.3 言語的・文化的体験の記録

生徒の達成感を醸成し、今後の学習動機を高めるためには、言語的・文化的体験を記録することが必要だと考え、「ふりかえりシート」を作成した(図5)。そして、5～6課に1回(2か月に1回程度)設けられている復習の時間にあわせて、ふりかえりの時間を作り、復習対象課で何を学んだかクラス全体でふりかえりを行ったうえで、各自「ふりかえりシート」に記入させた。「ふりかえりシート」に設けた項目は、復習対象課を学んで①一番楽しかったこと、②できるようになったこと、③新しく知ったこと、④これからできるようにになりたいこと、⑤もっと知りたいことの5点である。

図5 「ふりかえりシート」

3.2.4 学習の成果

生徒が自分で学習過程や成果をふりかえることができるよう、日本語の授業で書いたものや作ったものなど、自分が大切にしたいものをファイルに入れていくよう生徒に伝えた。例えば、名前のカードや家族を紹介するために描いた絵、インタビュー活動のタスクシート、教科書の各課にある「あそびましょう・はなしましよ」という文化コーナーで考えたことや作ったものなどである。また、生徒がこれらをファイルに保存することで、保護者にも子供が日本語の授業でどのように学び、何を体験しているのか、学習の過程を共有できるようにした。

4. ポートフォリオの導入の結果と分析

4.1 アンケートの概要

初等日本語教育を実施している2校では、初等日本語教育に関する課題が改善されているかを確認するとともに、より円滑に実施していけるよう、初等日本語教育にかかる現状と課題を把握することを目的として、学期末に生徒と担当教師に対してアンケートを実施している。本章では、2020-2021学年度1学期末に実施したアンケート(表2)の結果をもとに、ポートフォリオに対する生徒と担当教師の評価について報告し、ポートフォリオの導入が課題の解決にどのような効果があったかについて分析を行う。

表2 アンケートの実施概要

実施時期	2020-2021学年度1学期末（2021年1月）
対象者	ア. 小学3年生の生徒（120名）（回答率91.7%） イ. 小学4年生の生徒（118名）（回答率94.9%） ウ. 小学3・4年生の日本語の授業を担当した教師（4名）（回答率100%）
方法	ア. 生徒へは質問紙法でアンケート調査を実施した。（所要時間は10分程度） イ. 教師へは Google Forms でアンケート調査を行い、必要に応じて個別面談による聞き取り調査を実施した。

4.2 アンケートの結果

4.2.1 生徒アンケートの結果

生徒アンケートで行った質問のうち、ポートフォリオに対する評価を表3に示す。ポートフォリオが勉強の役に立ったかどうかを問う質問（質問1）では、3年生は85.5%、4年生は75.9%の生徒から肯定的な回答が得られた。また、保管するツールとして役に立ったかどうかを問う質問（質問2）では、3年生は87.3%、4年生は81.3%の生徒から肯定的な回答が得られた。

表3 生徒アンケートの結果

質問	学年	とても役に立った	役に立った	どちらでもない	役に立たなかった	全然役に立たなかった
1 「Can-do チェックシート」や「ふりかえりシート」は、あなたの勉強に役立ちましたか。	3年生	62人 (56.4%)	32人 (29.1%)	15人 (13.6%)	1人 (0.9%)	0人 (0.0%)
	4年生	51人 (45.5%)	34人 (30.4%)	20人 (17.9%)	3人 (2.7%)	4人 (3.6%)
2 「たからばこ」のファイルは、日本語の勉強に関係があるものをまとめておくのに役立ちましたか。	3年生	62人 (56.4%)	34人 (30.9%)	12人 (10.9%)	2人 (1.8%)	0人 (0.0%)
	4年生	56人 (50.0%)	35人 (31.3%)	17人 (15.2%)	2人 (1.8%)	2人 (1.8%)

質問1で肯定的な回答をした生徒には、何の役に立ったのか、具体的な理由を選択式（複数選択可能）で尋ねた。表4に各選択肢を選んだ生徒の割合を示す。なお、選択肢A-Dについては、3.1で触れたようにポートフォリオの効果として期待した「生徒が自分の日本語の熟達度を評価したり、体験を記録することで学習に対する動機づけを高めることができるという点」について、生徒自身はどう感じているかを調査するために採用したものである。

表4 ポートフォリオが役に立った理由として各選択肢を選んだ生徒の割合

選択肢（複数選択可能）	3年生	4年生
A 何を勉強したか思い出せる。	56.8%	54.1%
B 日本語で何ができるようになって、何がまだできないかがわかる。	49.5%	50.6%
C 自分の得意なことや苦手なことがわかる。	49.5%	56.5%
D もっと勉強したい気持ちになる。	28.4%	41.2%

ポートフォリオが役に立った理由として A、B、C を選択した生徒の割合を見る限り、ポートフォリオを肯定的に評価している生徒の約半数が、学習内容や日本語の熟達度を自分で把握できるという点を評価していると言える。また、ポートフォリオを肯定的に評価している生徒のうち、3年生は28.4%、4年生は41.2%の生徒がポートフォリオが学習の役に立った理由として、「D：もっと勉強したい気持ちになる。」を選択していた。

4.2.2 教師アンケートの結果

2校の授業を担当している4名の教師へのアンケートでは、ポートフォリオに対する評価として、ポートフォリオが生徒の役に立ったと思うか、また教師が生徒の様子を把握するのに役に立ったと思うかという質問を行った。教師のポートフォリオに対する評価を表5に示す。また、教師に対しては、アンケートの回答について聞き取り調査も行い、ポートフォリオが生徒や教師自身にとってどのように役に立ったのか、より詳細に質問した。

表5 教師アンケートの結果

	質問	とても そう思う	そう思う	どちらで もない	そう思わ ない	全然そう 思わない
1	「Can-do チェックシート」や「ふりかえりシート」は、生徒の勉強に役立ったと思いますか。	2人 (50.0%)	2人 (50.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
2	「たからばこ」のファイルは、生徒が日本語の勉強に関係があるものをまとめておくのに役立ったと思いますか。	3人 (75.0%)	1人 (25.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
3	「Can-do チェックシート」や「ふりかえりシート」は、教師が生徒のことを知るのに役立ったと思いますか。	3人 (75.0%)	1人 (25.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

まず、ポートフォリオが生徒の役に立ったと思うかという質問に対しては、ポートフォリオが生徒の「学習」の役に立ったと思うかという質問（質問1）も「保管するツール」として生徒の役に立ったと思うかという質問（質問2）も4名の教師全員が肯定的に回答した。そして、聞き取り調査では、生徒は学習のふりかえりを通して、「どんな場面の日本語を学びたいのか具体的な目標を考えたり、どんな文化に興味があるかなど、自分で考えて「ふりかえりシート」に記入できるようになった。」とのコメントが聞かれた。

さらに、生徒の学習に対する姿勢の変化について言及する教師もあり、「ポートフォリオを導入するまでは、日本語の学習に対して受け身な態度の生徒が多かった。自己評価やふりかえりを行うようになってから、生徒は自分ができることとまだできていないことを確認することができるようになってきている。そして、できないことはどうしたらできるようになるか自分で考えられるようになり、より積極的に学習するようになった。」との意見があった。

また、教師が生徒のことを知るのに役に立ったと思うかという質問（質問3）についても、

4名の教師全員が肯定的に回答した。この回答に関する聞き取り調査では、「生徒の状況を把握しやすくなった。」という意見があった。生徒が記入した「Can-do チェックシート」に目を通すことで、それぞれの生徒がどの程度できるようになったと感じているのか、また「ふりかえりシート」では、どのような学習内容や活動を楽しんでいるか、何に興味があるのか把握できるようになったようである。

4.3 分析

4.3.1 生徒に関する課題への効果

2.2.2 で述べた初等日本語教育に関する課題のうち、生徒に関しては生徒が目標を持って勉強に取り組めるよう動機づけを高めることが課題として挙げられていた。小学生の多くは、自分の意志とは関係なく日本語を学び始めるケースが多いことから、日本語学習を続けていくためには、日本や日本語に対する興味や関心を促進し、学習を通して達成感を醸成することが動機づけを高めるうえでは重要である。

4.2.1 の生徒アンケートの結果で報告した通り、約8割の生徒がポートフォリオは日本語学習の役に立つと捉えていることが分かった。一方で、ポートフォリオが役に立った理由として「D：もっと勉強したい気持ちになる。」を選んだ生徒は、3年生で28.4%、4年生で41.2%であり、他の選択肢A～Cに比べると低かった。しかし、教師への聞き取り調査では「「ふりかえりシート」には今後について具体的な目標を書いている生徒が多く見られた。」等、生徒の学習に対する姿勢の変化についてのコメントがあったことから、動機づけへの効果はあったと考えられる。日本語を使う環境が身近にあるわけではない小学生にとって、定期的に学習のふりかえりの機会をもつことは、何ができるようになったのかを意識し、今後何ができるようになりたいかを考えることができるという点で、動機づけに良い影響を与えていたのであろう。

今回の調査では、ポートフォリオへの肯定的な評価は4年生より3年生の方が約10%高い結果となったが、この点については、4年生になると学習進度が上がり、ふりかえりの時間を十分に授業内に確保することができず、クラスによっては「Can-do チェックシート」や「ふりかえりシート」への記入を宿題としたこと等が影響していると考えられる。

また、試行段階における生徒の学習環境に係る課題として、1クラスの人数の多さが挙げられていた。ベトナムの小学校では1クラスの人数は約60人と多く、教師からも「教室で生徒の様子を観察するのが難しい。」「生徒一人ずつの状況を把握して、適切な対応をするのは難しい。」とのコメントが聞かれている。1クラスの人数が多いという問題自体の解決は難しいが、上記の教師への聞き取り調査の結果を見る限り、「ふりかえりシート」を通して生徒が何を考えているのかを知ることができ、教師が一人一人の生徒の様子を把握する際の助けとなっていることがうかがえた。したがって、ポートフォリオの導入によって、クラスの人数は同じであっ

ても、生徒の能力や興味・関心にあわせて、授業が実施しやすくなったと言えるだろう。

4.3.2 保護者に関する課題への効果

2.2.2でも取り上げたように、試行段階でモデル校から挙げられた課題として、学校内で日本語科目を担当している教師しか日本語を理解できる者がいないため、日本語教育が順調に実施されているかの把握が難しく、日本語教育の実施についても不安を感じている保護者が少なからず見られ、理解が得られにくいという点があった。日本語教育を円滑に実施していくためには、日本語教育の実施状況について、担当教師が把握するだけでは不十分であり、学校関係者、そして保護者の理解を得ることが重要である。そして、これらの課題を解決するためには、日本語教育の実施状況、具体的には生徒の日本語学習の過程や成果を学校関係者や保護者に分かりやすい形で共有することが必要であるとされていた。

「Can-do チェックシート」や「学習評価シート」は、保護者に子供の学習の様子を把握してもらったツールとして利用したが、「Can-do チェックシート」に設けていた4課に1回の保護者の確認欄には保護者のサインだけでなく「子供が日本語に興味を持つようになった。先生、ありがとう。(筆者訳)」、「子供が日本語で何をどこまで勉強しているか確認できた。(筆者訳)」という記入が見られた。担当教師への聞き取りでも「ポートフォリオの導入によって、保護者は子供の学習に対してより多くの注意を払うようになり、それによって子供の学習のサポートをするようになった。」とのコメントが聞かれ、期待していた役割を果たしていたことが確認できた。つまり、ポートフォリオを活用することで、生徒と教師だけでなく、生徒と教師と保護者が、日本語学習の過程を共有することができるようになり、それが日本語教育に対する理解促進につながっていたことがうかがえた。

5. まとめと今後の課題

本稿では、ベトナムにおける初等日本語教育の試行段階から普及段階にかけての経緯と課題を概観したうえで、その課題の一部を解決するための試みとしてのポートフォリオの活用とその成果について、生徒と教師に対するアンケート結果から報告を行った。

国家外国語プロジェクトの目標に沿って、初等日本語教育を展開していくためには、生徒が目標を持って勉強に取り組めるよう日本語学習に対する動機づけを高めることが大切であり、そのためには、学校関係者や保護者の理解や支援が必要不可欠である。評価セミナーで報告された課題のうち、本稿で取り上げたのは生徒と保護者に関する課題の一部のみであるものの、ポートフォリオの活用はこれらの課題解決の糸口になることがうかがえた。

最後に、今後の課題について触れておく。今回は2020年9月から2021年1月までの1学期のアンケート結果のみの分析であるため、ポートフォリオの導入の成果やより効果的な活用の仕

方については、継続した調査を行うとともに、学校関係者や保護者への聞き取りも必要であろう。効果的な活用については、ポートフォリオを扱う時の留意点として国際交流基金（2017：27）で、学習成果のふりかえりは、学習者自身の主体性にまかせるだけではなく、コース内の活動として組みこみ、教師やクラスメートと一緒にふりかえる機会を設けることで、学習者の自律的な学習能力を継続的に育成すると述べられている。今回の調査ではポートフォリオへの肯定的な評価は3年生と4年生で約10%の差があったが、その差の生じた理由を明らかにするとともに、今後ポートフォリオの扱い方やふりかえりの仕方についても、担当教師の理解を促進していく必要があると思われる。また、今回担当教師からはポートフォリオの導入によって、「生徒が自分で学びたいことを考えられるようになった」とのコメントが聞かれた。この点は、新教育カリキュラムで目標とされている自律学習能力の育成とも重なる点である。今後は、ポートフォリオの活用が生徒の自律学習能力の育成にどのように寄与しているのかという点からの考察も重要であろう。

さらに、生徒アンケートの自由記述欄では「高校3年生まで日本語を勉強したい（筆者訳）」、「日本語を勉強して、将来日本へ留学したい（筆者訳）」などのコメントも見られているが、小学3年生で日本語学習を始め、その後も日本語の勉強を続けたいと思う生徒が中学、高校と日本語の勉強を続けていけるよう、アーティキュレーションの問題を解決していくことも課題となっている。このような状況において、ポートフォリオは小学校から日本語を勉強し始めた生徒が中学、高校、大学に進学した際に、それまでの学習成果を伝えるツールとして活用することもできるだろう。

初等教育段階での日本語教育の開始に伴い、小学校から大学まで連続性と一貫性を持った日本語教育が実施できるよう、各段階の日本語教育実施機関や関係者との連携が今まで以上に必要となってきている。今後もベトナム側の日本語教育関係機関と協力し、ベトナムにおける日本語教育が円滑に実施されるよう支援していきたい。

〔注〕

- ^① ベトナムの教育制度は5-4-3制で、小学校は5年制（6～11歳）、中学校は4年制（11～15歳）、高校は3年制（15～18歳）である。また、学年の数え方は小学校から高校まで通して1年生～12年生となっている。
- ^② ベトナムの学年度は9月に開始し、8月に終了する。
- ^③ 栗原他（2018）は、国家外国語プロジェクトの目標について、「この目標を達成するために、大学や職業訓練学校、3年次から12年次を対象とする初中等教育、その他における外国語教育強化プログラムを実施することが掲げられ、その具体的な方策として、運営評議会の設置や計画・訓練プランの構築、外国語教育機関の基盤整備、各教育機関の学習機材への投資、国際連携の強化、公教育以外の学習環境の整備が挙げられている。」と述べている。また、以前は「刷新プロジェクト」、または「プロジェクト2020」と呼ばれていたが、2018年に国家外国語プロジェクトに改称された。
- ^④ 試行段階で作成されたベトナムの初等教科書については栗原他（2018）に詳しい。なお、評価セミナー

の結論を受けて、教科書の内容の見直しが行われており、2021年8月現在教科書の改訂作業が行われている。

- ⁽⁵⁾ 国家外国語プロジェクトのもと、第一外国語の英語のカリキュラムは2018年に、日本語、中国語、フランス語、ロシア語の第一外国語のカリキュラムは2021年にベトナムの教育訓練省によって正式に発表された (BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO 2021)。また、ドイツ語と韓国語については、第一外国語としての試行段階が開始されることが2021年2月に教育訓練省より発表されている。
- ⁽⁶⁾ 2018年に教育訓練省によって発表された「普通教育カリキュラム」は、1年生～12年生までの教育目標と計画が書かれており、「普通教育の質と効果に係る根本的かつ包括的な変化をもたらす、知識教育・人材育成・キャリア志向を組み合わせるほかに、「知識付与に重きを置く教育」から「資質と能力の両方で包括的に成長し、徳・知・体・美の調和をとり、学習者に最高の可能性を促進する教育」に変えることに寄与する (筆者訳)」とされている (BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO 2018)。
- ⁽⁷⁾ 国際交流基金 (2017:25) では、ポートフォリオの効果として①教師と学習者が学習目標と学習の過程を共有できる、②学習者が他の教育機関に移動したときにそれまでの学習成果を正確に伝えることができる、③学習者が自己評価や体験を記録することで、課題遂行能力や異文化理解能力だけでなく、自律学習能力や学習の動機づけを高めることができる、④日本語能力だけでなく、教室の中や外で学んださまざまな知識や技能の学習成果の評価も行うことができるという点が挙げられている。
- ⁽⁸⁾ 今回のポートフォリオの導入は試行的に行ったものであるため、成績には含めていない。

〔参考文献〕

- 栗原幸則・ゴ ミン トゥイ・ダオ ティ ガア ミー・チャン キエウ フエー・ファム ティトゥ ハー・ホアン トゥ チャン・佐藤修 (2018) 「ベトナムの初等教育向け国定教科書の開発について」『国際交流基金日本語教育紀要』14、91-98
- 国際交流基金 (2017) 『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』、国際交流基金
国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 ベトナム (2020年度)」
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/vietnam.html>>
(2021年8月15日)
- 在ベトナム日本国大使館 (2016) 「ベトナムの初等・中等教育における日本語教育の導入に関する教育訓練省との合意について」
<https://www.vn.emb-japan.go.jp/jp/culture/Kako_katsudo/jp_giaoductiengnhathat20160224.html>
(2021年8月20日)
- BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO (2018) Số 32/2018/TT-BGDĐT “CHƯƠNG TRÌNH GIÁO DỤC PHỔ THÔNG CHƯƠNG TRÌNH TỔNG THỂ”<<https://data.moet.gov.vn/index.php/s/LETzPhj5sGGnDii>>
(2021年8月20日)
- BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO (2021) Số 19/2021/TT-BGDĐT “CHƯƠNG TRÌNH GIÁO DỤC PHỔ THÔNG MÔN TIẾNG NHẬT - NGOẠI NGỮ 1”
<https://moet.gov.vn/content/vanban/Lists/VBPQ/Attachments/1408/19_2021_TT_BGDDT_Tieng%20Nhat.PDF> (2021年8月20日)